

若年層 命のSOS急増

笛吹の緊急宿泊利用 40代以下が7割

「死にたい。助けて」。1月下旬、同法人に24歳の男性から悲痛なメールが届いた。夜中、強引に山梨県内の工事現場へ連れてこられた。戻りたいと申し出たが、派遣元から高額な違約金を迫られたという。

〈窪田あずみ〉

から今年5月までの間では40代以下が7割超を占めた。母子での宿泊も開設以来初めてあった。劣悪な条件で働きながら、相談相手や支援の情報を持たない人が多く、同法人は「支援の手が届かず、命を落とす若者もいるのではないか」と危惧している。

路上生活者や生活困窮者を支援するNPO法人「やまなしライフサポート」(中山八十司理事長)が運営する緊急一時宿泊施設「ライフ荘」(笛吹市)で、若年層の利用が急増している。2013年に開設したライフ荘の利用者は半数以上が50～70代だったが、1年ほど前から若年層が増え始め、昨年4月



ライフ荘を利用する36歳男性と就職先について話す中山八十司理事長。男性は職を失い車上生活をしていた。＝笛吹市内

困窮者ら労働条件悪化か

「生きた心地がしなかった。戻れる方法を必死に探して、インターネットでやまなしライフサポートを見つけ、連絡を取った」と男性は振り返る。同法人の支援を受けてライフ荘に身を寄せ、関西地方に戻ることができた。

男性は両親から虐待を受け、中学生の時から児童養護施設で育ち、アルバイトと奨学金で通信制高校を卒業した。今は航空機関連の会社で寮に入って働くが、奨学金を返済しながらの生活はぎりぎり、契約社員のため身分は不安定。契約が更新されなければ収入も住む場所も失う。

両親とは音信不通で頼れる人もいない。同法人に相談できるようになり、少し気が楽になったが、「派遣社員は、納得できなくても簡単に切られてしまう。安心して働ける

環境がほしい」と訴える。ライフ荘は住まいが確保できるまで2週間を目安に、無料で生活場所と食事を提供する施設。14年度は38人が利用し、40代以下は36・8%だった。

昨年4月から今年5月までの利用者32人のうち、40代以下が71・9%を占め、40代が10人、30代が6人、20代が2人、母親に連れられた10代が5人。10代の子どもを除き女性の利用は4人で、うち3人が子ども連れだった。

男性の利用者は、非正規雇用で職を失うと同時に、住まいも失った人が多く、3日で千円の労働や給料の未払いなど劣悪な環境で働いていた人もいた。女性は離婚が原因で貧困に陥る人が目立ち、男女を問わず頼れる身内や知人がおらず、支援制度や相談機関・団体の情報が得られない人がほとんどだという。

中山理事長は、若年層や母子の利用が増えていることを「異常な事態」とし、「労働条件が悪化し、収入が低い人たちの生活水準がさらに低下していると感じる。家族や社会とのつながりが薄く、救われる方法を知らない若者が犠牲になっていて、心を閉ざして支援を拒み続ける人もいる。国や県でしっかりと対策を考えることが急務だ」と話した。